

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 4 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520950

研究課題名(和文)近代日本のコロニアル・ツーリズムと北東アジアの心象地理

研究課題名(英文)Colonial tourism in modern Japan and imaginative geographies of Northeast Asia

研究代表者

米家 泰作(Komeie, Taisaku)

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：10315864

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円、(間接経費) 480,000円

研究成果の概要(和文)：北東アジア(朝鮮半島・中国東北部)は、近代日本において最も注目された海外旅行先であり、帝国日本の植民地形成にともなって、多くの日本人が訪問した。旅行者が旅行体験を通じて形成した心象地理(現地に対する地理的なイメージや理解)は、旅行記の執筆を含め、様々な形で本国に還流したと考えられる。そこで本研究では、単行本として刊行された旅行記に着目し、その目録を作成するとともに、旅程の広がりや変化、旅行者の属性を確認し、彼らの旅行体験と心象地理の関わりを検討した。旅行者の多くは、似通った旅程を受動的に周遊し、もっぱら日本の影響力や支配力を表面的に確認する旅を行い、植民地的な観点から心象地理を形成した。

研究成果の概要(英文)：Northeast Asia (Korean Peninsula and Dongbei Area of China) was the most popular destination of the modern Japanese overseas tourism; The expansion of Japanese colonies encouraged many Japanese people to visit the areas. Imaginative geographies (geographical imageries and understandings) on the areas that the Japanese travelers made through their trips could be come back to and circulated within the mainland of Japan with various channels. Making a bibliography on travel writings published as books in those days, this study investigates their itineraries and the attribution of travelers both spatially and historically, and examines relationships between their travel experiences and imaginative geographies. Most of travelers had round trips passively with similar itineraries, made superficial observations on the Japanese influences and domination on the areas, and shaped imaginative geographies from colonial viewpoints.

研究分野：人文地理学

科研費の分科・細目：人文地理学

キーワード：旅行記 心象地理 朝鮮半島 中国東北部 植民地主義 ツーリズム

1. 研究開始当初の背景

本研究は次の3つの背景から着想されている。

第1は、サイードのオリエンタリズム論によって提起され、文化・歴史地理学においてもグレゴリーらによって議論が進んだ帝国主義と心象地理の関係である。この論点はもはや古典的な論点のようにみられがちであるが、一方では、宗主国の旅行者が多様で複雑な旅行経験をしたことや、旅行者が他の植民地や本国の広い地理的ネットワークのなかで互いに影響しあったこと、また植民地が一方的に表象されるだけの存在ではなく、訪問者の理解に影響力を持っていたことが指摘されている(例えば、報告者ほか訳『モダニティの歴史地理』。また5. 主な発表論文等[雑誌論文]も参照)。これらの指摘は、少数の著名人の心象地理を検討して良しとする初期の研究を批判するとともに、心象地理が再生産される複雑かつ地理的なプロセスを、丁寧かつ地道に捉える作業がなお必要であることを示している。

第2に、上記の視点から近代日本を省みる時、知識人や学術、マスメディアによる植民地理解については研究の進展が見られるのに対して、大衆的な植民地旅行に対する研究は必ずしも十分ではなかった。しかし、有山輝雄『海外観光旅行の誕生』が素描しているように、明治末期から盛んとなった日本人の海外旅行、とくに北東アジア(朝鮮半島と中国東北部)への旅は、帝国の一員というアイデンティティ形成の場であり、旅行者は植民地やその周辺地域に関する理解を本国に持ち帰る役割を果たした。また曾山毅『植民地台湾と近代ツーリズム』が示すように、日本人観光客の受け入れは植民地の景観と経済に少なからず影響を与えた。ツーリズム産業によって受け入れ体制が整えられた植民地への旅は、「コロニアル・ツーリズム」として捉えられるべきものであり、浅薄な心象地理と帝国意識が広範に再生産され、本国に還流する機会になったと考えられる。

第3に、大衆的なコロニアル・ツーリズムがもたらした旅行体験に関しては、荒山正彦や神田孝治といった文化地理学者による若干の検討があるものの、限られた少数の旅行記の検討から議論を展開する傾向があった。しかし申請者は朝鮮半島の史蹟景観に関する研究のなかで(5. 主な発表論文等[雑誌論文]を参照)、コロニアル・ツーリズムによる旅行記の自費出版や研修報告の公刊が、実際には夥しく行われていたことに気づいた。また、史蹟景観の整備に代表されるように、観光客を多く集めた場所では、当然ながら受け入れのための工夫が為されており、旅行者の心象地理はその強い影響を受けていた。

2. 研究の目的

以上のような背景を鑑みれば、近代日本の

コロニアル・ツーリズムに関して、資料としてこれまで注目されていない旅行記を「再発見」する作業が、まずは必要であろう。その際、旅行者を最も集めた地域だと考えられる北東アジア(朝鮮半島と中国東北部)を対象として、そこへの旅行記の目録を作成する。その上で、旅行の目的・ルート・訪問地の傾向とその変化を、総合的に検討することを研究目的の一つとする。従来、その主要な旅行ルートや訪問地については、観光ガイドブックに基づいて示唆されることはあったが、実際の旅行者の旅程例を統計的に有意な形で分析する作業は為されていないため、本研究ではこれを課題の一つとする。

以上の基礎的な作業を踏まえて、本研究では旅行者の心象地理の内容に関わる分析を、もう一つの研究目的としたい。具体的には、植民地やその周辺で体験した事柄から、旅行者が本国と対象地をどのように比較するか、その比較にどのような先入観が影響し、あるいは新しい「発見」があったか、そしてどのような自己アイデンティティを形成するかに留意して、旅行記を読み解く。その際、全体として植民地やその周辺を劣等視する見方が卓越していたとしても、細かな「発見」や視線の差違にも留意したい。また、修学旅行や同業・地域団体の研修旅行といった団体旅行の場合、同行者との交流のなかでの認識の共有も重要な論点となる。

その際、留意すべきこととして、旅行者の心象地理は、巧みにお膳立てされたツアーやイベント、あるいは現地での対応に左右されると考えられる。植民地とその周辺の旅行体験として、旅行者が期待していたもの、旅行される側が期待していたもの、そしてそこから巧妙に排除された事柄や現地の人々の位置づけについても検討したい。具体的な場所におけるツーリズム産業の勃興と旅行者の心象地理との関連が課題となる。

本研究は、以上の分析を通じて、近代日本人のコロニアル・ツーリズムの性質と、それが日本人の心象地理形成に果たした役割を考察する。

3. 研究の方法

以上の目的に迫るために、本研究の方法は次の2つのステップから構成される。

第1は、近代日本のコロニアル・ツーリズムに関して、資料としてこれまで注目されていない旅行記を「再発見」し、その旅程を分析する作業である。まず明治～昭和20年(1868～1945)において作成された日本人の海外旅行記の目録を作成した上で、北東アジアに関して分析の対象となる旅行記の範囲を定める。次いで、対象となる旅行記に関して、旅行者の属性、旅行目的、旅行日程、旅行ルート、訪問地の情報をデータベースとして整理する。これによって、例えば、特定の期間内に特定の場所を訪問した旅行記を一括して抽出するようなことが可能となる。

この作業を経て、北東アジア旅行における典型的な旅程がどのようなものかを分析する。交通手段が限定されていることもあり、北東アジアを周遊する旅程には幾つか代表的なものがあったことが予想されるが、鉄道路線の新設や航空機の導入などの年代による変化や、旅行者の属性・目的による差違に留意したい。とりわけ大衆的な旅行を代表する修学旅行ならびに同業者団体や地縁団体による親睦的な研修旅行に着目する。

第2に、旅行記に記された朝鮮半島・中国東北部への理解、ならびに植民地と帝国をめぐる旅行者の認識を分析する。旅行記には、現地の景観や人々に対する「率直」な印象や、渡航以前の予想との一致や齟齬に言及されていることが多い。とりわけ景観に対する解釈は、帝国主義的な意識と関わりがちである。現地の人々もまた、旅行者にとっては交流の機会に乏しい対象であり、あたかも景観の一要素として観察されることが多い。しかし旅行者は、浅薄で表面的な観察にとどまりがちであるにもかかわらず、それらを実体験したとの自信に立脚して、自らの心象地理を形成していくことになる。

その際、特定の観光地において多く旅行者が類似の体験を行い、類似の心象地理を抱きがちであったと予想される。例えば、平壤においては日清戦争史跡と妓生（キーセン）学校の見学が観光の定番であり、旅行者は戦跡で帝国意識を自身のものとする一方で、本国と植民地の間に特定のジェンダー関係を投影することができたと考えられる。このような場所は日本人向けの観光地として成長し、旅行者の好奇心と期待を満足させるための受け入れ体制が整備されていったと推測される。そこで本研究では、特徴的で有力な観光地に着目し、同一観光地を訪問した旅行記を集中的に検討し、「お膳立て」されたなかでの旅行体験の特質を探りたい。

4. 研究成果

(1) 対象とした旅行記とその出版動向

本研究では、すでに先学によって整備されている様々な文献目録を参照し、また国立国会図書館などの主要な図書館の蔵書検索を利用して、明治～昭和20年（1868～1945）に出版された北東アジアへの旅行記を網羅的にリストアップする作業を進めた。その結果、朝鮮半島や中国東北部への旅行記が、約300点にのぼることが確認できた。ただし、この作業においては、単行本として刊行された旅行記の所在が把握しやすい一方で、さまざまな雑誌中の記事として刊行された旅行記については、従来の目録や蔵書検索では十分把握できず、付随的にリストアップするにとどまった。

次いで、旅行記から旅程を分析するために、対象期間を関釜航路や京釜鉄道が通じた1905年からアジア太平洋戦争が終結した1945年に限定し、かつ単行本として刊行され、

旅程が明示的な旅行記 175 点を対象として、その旅程をデータベースにまとめた。ただし、複数の旅行記録を収録した旅行記があるため、旅行件数は179件となる。

なお旅行記の出版動向からは、コロニアル・ツーリズムの動静をある程度窺うことができる。すなわち、対象とした旅行の出版は、1925年から1940年頃に大きく集中しており、それ以前の時期については散発的に小さなピークがあるに過ぎない。先行研究は日露戦争後に鮮満旅行が盛んになったことを指摘してきたが、それがツーリズムとして大きく展開するまでは、さらに約20年が経過するのを待たねばならなかったといえる。

また、旅行の主体としては、実業家の旅、教員の旅、修学旅行など学生が主体の旅、慰霊や布教など宗教家の旅、役人や政治家の旅、参加者募集型の団体旅行、作家や芸術家の旅、その他、の8類型に分類することができた。先行研究では、もっぱら・・・に関心が集中してきたが、実業家のように、同業者団体や地方の経済団体がビジネスチャンスの視察と親睦のために、盛んに朝鮮半島や中国東北部に団体旅行を行っていたことが確認された。

(2) 旅程の特徴

対象とした旅行記が旅程に関して、まず旅行日数を指標として訪問地の地域的な比重とその時期ごとの傾向を概観しておく。表1は便宜的に対象期間を4つに分け、記載された179件の旅行に関して、旅程の全日数と、朝鮮半島と中国東北部での滞在日数の平均値をそれぞれ示したものである。これによれば、旅行の全日数が、1924年までは平均して1か月半あったものが、1925年以降は1か月程度に短縮する傾向があったことが判る。それに伴い、北京や上海など中国の他地域を周回することが減少した。一方、中国東北部に費やす日数が余り変わらないか、むしろ増加傾向にあるなかで、朝鮮半島にかける日数は1週間以内に減少し、朝鮮半島の位置づけが、主たる旅行目的というよりも、中国東北部への経路上、立ち寄るに都合の良い地域へと変化していったことを表している。

続いて図1は、対象とした旅行記にみられる訪問地の位置を示したものであり、朝鮮半島では116か所、中国東北部では109か所の

表1 旅行の日数

年次	全日数	うち朝鮮半島の日数	うち中国東北部の日数
1905 ~ 1914 年	44.7	14.5	12.2
1915 ~ 1924 年	47.4	11.1	13.6
1925 ~ 1934 年	29.1	6.5	12.3
1935 ~ 1944 年	28.6	6.2	16.6

訪問地を数えることができる。ただし訪問件数の数を見れば、鉄道で結ばれた都市が主要な訪問地になっていたことは明白である。例えば、まず航路での出入り口となる釜山(161件)と大連(159件)があり、京城(現ソウル, 159件)、平壤(108件)、安東(89件)、奉天(現瀋陽, 161件)、そして旅順(147件)、撫順(120件)、長春・新京(121件)、哈爾濱(107件)が挙げられる。これら10都市が、群を抜いて代表的な訪問地であった。

これらの都市のほとんどは、日本が大韓帝国統監府や朝鮮総督府、そして南滿洲鉄道(以下、満鉄と略す)を通じて支配権を握った路線、すなわち京釜線(釜山-京城)、京義線(京城-平壤-安東)、安奉線(安東-奉天)、連京線(満鉄本線, 大連-奉天-長春・新京)の中核をなす都市であった。その意味で鮮満ツーリズムは、基本的には、鉄道網に対する日本のコロニアルな支配権のなかで展開したことが確認できる。この支配権のなかにおいては、日本人旅行者は現地の言語を解さずとも、おおむね不便なく旅行が可能であり、日本語環境を維持したまま現地と接することができたといえる。

時期ごとの傾向をみるために、図1では表1で用いた10年ごとの時期区分によって、件数の内訳を表示している。それによれば、1924年以前の訪問地は、奉天以南に偏る傾向があり、その比率が朝鮮半島で相対的に高く、長春や哈爾濱では低いことが読み取れる。しかし「満洲国」建国(1932年)によって長春が首都・新京となり、またロシアが東清鉄道を手放したことも関わって、特に1935年以後になると満洲北部への訪問者が数を伸ばした状況が窺える。先述したこの時期の中国東北部への比重の高まりは、満洲中心部・北部への関心の表れと連動していたといえる。

なお以上(1)(2)の分析の詳細については、5. 主な発表論文等[雑誌論文] に示した。

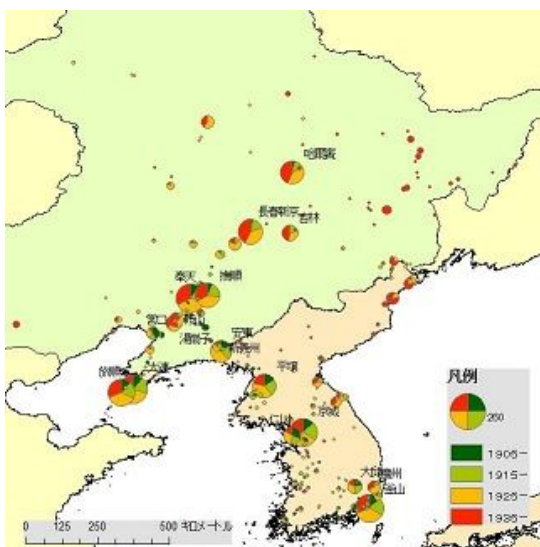


図1 訪問地の分布

(3) 旅行体験と心象地理の形成

以上のようなコロニアル・ツーリズムの展開のなかで、日本人旅行者が鉄道路線に規定された訪問地を周遊し、その旅行体験が似通ったものであったことは、多くの旅行者自身が自覚する所であった。海外旅行に不慣れな多くの日本人にとって、旅程の設計が国内外の鉄道が設けた案内所や日本旅行協会(JTB)に委ねられることが多かったためである。もちろん、教育者や実業家の旅行が、現地でも関連する学校や企業の見学を組み込むことは行われており、旅行者の類型によってある程度は訪問先の違いを見いだすことはできる。しかし、教育者も撫順炭鉱を見学し、実業家も奉天近郊の史蹟を見学していたように、訪問先は旅行者の属性に応じて明確に分かれていたわけではなく、むしろ朝鮮半島・中国東北部を広く「視察」する姿勢が一般的であった。「終始じつに慌ただしい旅で、すべては映画のフラッシュバックの如く眼前を過ぎ去つた。何一つ省みたり、考へたりする暇はなかつた」(今村太平『満洲印象記』)という感想は、受動的な旅行者の姿をよく物語っている。

それゆえ、日本人旅行者の多くは、似たような旅行体験を共有したといえるが、にもかかわらず夥しい量の旅行記が執筆されたことは、個々の旅行者にとっては、北東アジアへの旅行が非常に意義深く、かけがえのない経験となったことを示している。ある実業家は、「鮮満北支に関しては従来あらゆる種類の著書が多いのに、頼まれもせぬ物好きな随筆など、今更ら事々しう書かずもがなとも思うたが、私には私だけの見地があり、また別個の感想も収得もある筈」(松本佐太郎『鮮満北支たび日記』)と序文に記した。こういった旅行記が執筆される背景には、帰国後に旅行体験を報告したり、紹介したり、同業者や生徒と共有することが求められていたことが小さくない。旅行者のなかで旅行記の刊行に至った旅行者は、割合としては小さなものであるが、旅行者が得た北東アジアの心象地理は、様々な形で内地に還流していったと考えなくてはならないだろう。

しかし彼らの体験の多くは、自発的な問題意識にそって主体的に組まれた旅程によるものではなく、また日本語環境の内側から現地をひとえに「視察」するものであり、全体として明らかに一定の偏りを帯びていた。それは例えば、重厚長大な社会資本や軍事活動に関心を奪われる一方で、現地の人々の日常生活文化には目が届きにくいという面を表れている。前者は、帝国日本のコロニアルな影響力を現地で体感し、それを称揚するという視点に繋がるものであり、まさに「植民地」として北東アジアを体験するあり方だといえる。そこでは、現地の社会や文化を独自のものとして評価する見方は成立しにくい。

(4)代表的な訪問地と心象地理

そのような傾向は、幾つかの代表的な訪問地でそれぞれ確認することができる。例えば、比較的初期に訪問件数が多かった仁川や安東、營口は、港湾と交易の発展が主題となる訪問地であり、現地では当局の担当者から日本との結びつきの可能性について解説を受けることができた。また、遼東半島から奉天にかけては、旅順を含め、日露戦争の戦場が点在しており、個別に時間をとらなくとも、鉄道の車中から注意を払う旅行者は少なくなかった。そこでは、帝国日本がつぎ込んだ犠牲を称揚し、獲得した日本の影響力を自賛することが行われており、帝国の一員としての自覚と貢献を旅行者に促す場所となっていた。

一方、日本語によって旅行者に対応できる人々との出会いを除けば、日本人が現地の人々と交流する機会は非常に乏しかった。加えて、現地の民家や宗教、生活や民俗に関心をいざなう旅行者は非常に少なく、現地の人々の生の姿にアプローチする意識が弱いことは、北東アジアへのコロニアル・ツーリズムに一貫する特徴である。ただし、平壤における妓生（キーセン）や哈爾濱の歓楽街におけるロシア人女性ダンサーへの関心のように、接客を旨とする女性との交流は、多くの旅行者にとって人気があり、現地の女性像を代表するものとなっている。それが、大挙して押し寄せる日本人旅行者を客として成立した観光上の姿であることを見抜く旅行者もいたが、日本の支配を甘んじて受け入れた民族の姿として捉え、優越感にひたる旅行者も少なくなかった。

以上のような個別の旅行体験と心象地理との結びつきは、ほかにも様々な具体例を挙げることができ、近代日本にとっての北東アジアへのコロニアル・ツーリズムの特徴として、さらなる検討が求められる。その際、少数ながら、旅行者が個別の関心に基づいて、他の旅行者が少ない地域を周遊した例についても、別途分析が必要であろう。今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

米家泰作, 「扶余神宮と史蹟 植民地朝鮮における『内鮮一体』の景観」, 歴史の理論と教育, 査読有, 135・136 合併号, 2011年, 45-61 頁

米家泰作, 「『近代』概念の空間的含意をめぐって モダン・ヒストリカル・ジオグラフィの視座と展望」, 歴史地理学, 査読無, 54 巻 1 号, 2012 年, 68-83 頁

K. Onoda, S. Miyamoto, H. Fujita, T. Komeie, N. Kawahara, and H. Kawaguchi Historical geography in Japan since 1980,

人文地理, 査読無, 65 巻 1 号, 2013 年, 1-28 頁

米家泰作, 「近代日本における植民地旅行記の基礎的研究 - 鮮満旅行記にみるツーリズム空間 -」, 京都大学文学部研究紀要, 査読無, 53 号, 2014 年, 319-364 頁。

[学会発表](計2件)

米家泰作, 「『近代』概念の空間的含意をめぐって モダン・ヒストリカル・ジオグラフィの視座と展望」, 歴史地理学会大会(山口大学), 2011年6月26日

米家泰作, 「近代日本のコロニアルツーリズムと鮮満旅行記」, 人文地理学会大会(大阪市立大学), 2013年11月10日

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]

ホームページ等

京都大学教育研究活動データベース

<http://kyouindb.iimc.kyoto-u.ac.jp/j/sd3iQ>

6. 研究組織

(1)研究代表者

米家 泰作 (KOMEIE Taisaku)

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号: 10315864

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし